導きと賛美

柏倉桃子

全学礼拝懇談会でこのような機会を与えられましたことを感謝いたします。私とキリスト教との出会いは日本キリスト教団の植竹幼稚園に年長時に途中編入したことでした。そこから遡ること二年、私は新築した家が原因でシックハウス症候群を発症し、それに起因する喘息などの幾つもの病気のため入退院をくりかえしていました。幼稚園にもほとんど通えず、このままの病状だと小学校に上がるまで生きられるかどうかと医師に宣告されるほどでした。病気療養のため家族ともども母の実家に居を移し、母の母校である植竹幼稚園に転入し、近所の大宮シオン・ルーテル教会の教会学校に通うようになりました。そしてその後同じく母の母校である浦和ルーテル学院に入学したのでした。そのうち幼い私にとって『こどもさんびか』と『聖書』の話は大切な物になっていきました。転地療養と良い医師の甲斐あってシックハウスの症状はだいぶ抑えられるようになりました。しかし、小学二年のときに一時、学校には行きたいのに登下校が困難になるような出来事が起こりました。そんな私を「学校に行かなくてもいいから教会にいらっしゃい」と支えてくれたのは、当時の浦和ルーテル学院の理事長でもあった大宮シオン・ルーテル学院教会の牧師先生でした。その後中学一年のときに母と妹と三人で受洗し、私はマリア、妹はマル

タという洗礼名を頂きキリスト者としての生活がスタートしました。本来聖書に登場するこの姉妹はマルタが姉でマリアが妹ですが、私と妹の性格が逆のほうがしっくりくると姉妹の洗礼名が逆転しました。このとき、前の牧師先生は新潟の教会に移られていて、私たちに洗礼を授けてくださったのは現在の教職である執事（女性教職）の先生でした。

聖歌隊との出会いは小学校の入学式でした。式典の途中で献歌した白いガウンに輝く十字架を首から提げて、外国語の歌を歌っていた中高等部のお姉さんたちに憧れたのだと思います。聖歌隊は中等部以上からだったため初等部時は合唱部に入り、中学生になって憧れの聖歌隊に入ることができました。教会で定期的に開かれるチャーチコンサートにも楽器のできる友人と共に参加しました。途中、学校のリフォーム工事の度にシックハウス症状が悪化し半日登校、半日点滴という状態が続くこともありましたが、辛い時期を支えてくれたのはキリスト教信仰でした。

聖学院大学にはクリスチャン推薦入試で入学しました。高校時代進路を考えるとき、キリスト教大学以外は考えられませんでした。そして聖学院大学を薦めてくれたのが教会の牧師先生で、学びたい日本文化の学科もあり、オープンキャンパスで話を聞いたりするうちにこの大学しか考えられなくなりました。この大学に入ったら聖歌隊に入るということも最初から決めていました。

大学に入学し聖歌隊に入って、先生や先輩もあたたかく、ここは自分に合っている、そう実感しています。今まではルター派の学校、教会だったため大学では違うこともたくさんあるのだろうと思っていましたが、主の祈りの文言が若干違うくらいしか気になりませんでした。私の通っている教会では『教会賛美歌』という賛美歌集を使用していますが、浦和ルーテル学院では十二年間この大学と同じ讃美歌を使用していたので馴染みがあり、全学礼拝での聖歌隊の賛美奉献もほとんどがこの讃美歌の曲で知っている曲ばかりで、曲の歌詞や背景を分かった上で歌う

ことができました。今年度からは賛美奉献が毎月になり、昨年度と比べ回数が増えました。回数が増えるというのはそれだけ人の目に触れる頻度が上がるということです。それによって聖歌隊に興味をもってくれる学生が増えたらいいなと思っています。中学、高校時代の聖歌隊は入学式や卒業式などの式典やクリスマスやイースター、宗教改革記念などの特別な礼拝でしか出番はありませんでした。それに比べて毎月賛美奉献があるというのはハードでもありますがやりがいも感じています。

全学礼拝はレポートのために仕方なく行くという学生も少なからずいると思います。実際レポートの締め切りが迫ってくると参加人数がぐっと増えます。聖歌隊のことも興味ない人も多いだろうなと思っていた私に昨年、印象的なことがありました。賛美奉献のときに指揮の森野先生が別件の仕事のため不在のことが一度だけあり、指揮者がいなくてもそんなに気にされないだろうと思っていつもの賛美奉献の定位置に立つと、会衆席の学生が「あれ？いつもの指揮者がいない。どうしたんだろう？」などとざわついたことです。多くの学生がそこまで気にしてくれていたというのを嬉しく感じた瞬間でした。

しかしほとんどの学生は全学礼拝のとき讃美歌を歌えません。それは知らないから当然とも言えますが少し淋しいような気がします。私の母校、浦和ルーテル学院では初等部棟のみ始業前の朝の時間に賛美歌のＣＤを流していました。大学でも何かもっと学生に賛美歌を知ってもらえるようなことがあればいいなと思いました。

私がキリスト教と出会ったのは心身ともにボロボロの最悪の状態のときでした。そういう状態のときだからこそキリスト教の教えが心に響いたのだと思います。病気もせずに健康なままだったらキリスト教と出会うこともなかったはずです。病気のせいで辛かったことも諦めたこともたくさんありましたし、これからもあるでしょう。で

もキリスト教に出会わせてくれたことは感謝してもいいかなと思っています。これからも教会で、そして大学で、キリスト者として神を仰ぎ、人に仕えることができればと思っています。

（二〇一六年二月二十四日、二〇一五年度「全学礼拝懇談会」発題
テーマ「より豊かな礼拝を目指して―礼拝音楽をめぐって」）